

百人一首を書きましよう。

心あてに折らばや折らむ初霜の

置きまどはせる白菊の花

（Blank box for writing the poem above)

凡河内躬恒

有明のつれなく見えし別れより

暁ばかり憂きものはなし

（Blank box for writing the poem above)

壬生忠岑

朝ぼらけ有明の月と見るまでに

吉野の里に降れる白雪

（Blank box for writing the poem above)

坂上是則

山川に風のかけたるしがらみは

流れもあへぬ紅葉なりけり

（Blank box for writing the poem above)

春道列樹

【現代語訳】

あてずっぽうに、折るなら折ってみようか。初霜があたり一面に置いて、見分けがつかなくなっている白菊の花を。

【現代語訳】

有明の月が無情に見えたあの別れの時から、暁ほどつらく切ないものはありません。

【現代語訳】

夜がほんのり明け初めるところ、有明の月の光かと思われるほどに吉野の里に降る雪よ。

【現代語訳】

山中を流る川に風のかけたしがらみがありますが、それは流れようとしても流れることの出来ない紅葉もみじでありました。